

民具6(アイロン)

大野城市教育委員会



写真1 コテ

上の写真1の道具はいったい何に使うものでしょうか。この形から何かわかりますか。

これはコテ（鋏）という道具です。コテは、三角形をした鉄に木でできた柄がついたものです。

コテというと、壁を塗るときに使うものもありますが、これは布や衣類のしわを伸ばすのに使います。また、着物の仕立てをするときに縫い代を割ったり、袖口を仕立てたりするのに使用していました。今も使われているアイロンですね。コテは昭和のはじめころから使われていました。

使い方は、先の鉄の部分に火鉢などに直接差し込んで暖めて使います。布に当てるときは、当て方が強すぎると布が焦げてしまうので、力加減には注意していたようです。コテの熱さを調節するのは、コテの先をほおに近づけたり指につばをつけてすばやく触ってみて確かめたり、別の布を当てて熱さを調節して使っていました。



写真2 電気アイロン①



写真3 和裁用コテ



写真4 火のし



写真5 炭火アイロン①



写真6 炭火アイロン②



写真7 電気アイロン②



写真8 電気アイロン③

昭和の中ごろからは電気で暖めるコテが使われるようになりました。写真3の電気のコテは和裁用コテといって、今でも着物を仕立てる人が使っています。コテを立てておける筒状の容器に入れておくだけで温まります。

他に、布のしわを伸ばす道具は、どんな道具が使われていたでしょうか。

まず火のしという道具です(写真4)。漢字では火熨斗と書きます。火のしは、真鍮(しんちゅう)といって、銅と亜鉛とを合わせたもので作られていたものが多く、鍋のような形をしています。昭和の中ごろまでよく使われていたものです。炭火を器の中に入れて底を暖め、布に押し当てて使います。中には、炭を入れずにお湯を入れて使う、湯のしも使われていました。古くは平安時代に、貴族のふとんを暖める道具として使われていたようです。

炭火アイロン(写真5)は江戸時代ごろイギリスから輸入され多くの家庭で使われるようになっていったようです。この道具も火のしと同じで炭火を入れて使用します。コテと同じような形をしたものもあれば、現在のアイロンのような形をしていて、ガスを抜く煙突がついているものが多くありました。明治時代から昭和の初めごろまで使われていました。

電気アイロン②(写真7)は、雑餉隈にあった旅館のおかみさんが、嫁入り道具として持ってきて使っていたものだそうです。アイロンをしまう木箱ですが、ふたを返すと熱くなっているアイロンを置けるように鉄板がつけてあります。

電気アイロンは大正の初めごろに輸入されたあと日本でも造られたのですが、その当時にとっては値段がとても高く、一般家庭には手が届かない高級品だったようです。しだいにボタンやスイッチを入れるだけで温められる簡単なものや、昭和の終わりごろにはコードレスアイロンもできました。

参考文献

大野城市の文化財 第31集 大野城市の民具① 1999年3月31日
日本民具辞典 株式会社ぎょうせい 平成9年5月30日
日本民俗文化財事典 第一法規出版株式会社 昭和44年7月10日
昭和こども図鑑 20年代、30年代、40年代の昭和こども誌
株式会社ポプラ社 2001年7月
昭和を生きた道具たち 河出書房新社 2005年4月20日